

和図書館の長谷川優子氏から「埼玉県立浦和図書館の現状と課題」をご講義いただいた。このあと、約3ヶ月をかけて院生が提案を検討、2013年3月9日（土）15:00～17:00に11号館2階A203教室で開催されたビジネスクリエーター研究会にて、院生の4チームから、検討結果の報告が行われた（1チームあたり報告20分＋質疑10分）。浦和図書館の小西美穂氏と長谷川氏が質疑応答に立たれ、大変刺激的な報告会となった。この連携事業については、浦和図書館の司書の方たち、乙骨敏夫副館長、大久保泰氏、さらに青淵正幸准教授をはじめとするビジネスデザイン研究科の先生方に大変にお世話になった。この事業については、浦和図書館の長谷川氏から本誌に報告を寄せていただいた。

最後になってしまったが、11月19日（月）5限の、図書館情報資源概論の授業時に、ゲスト講師として、長年、国立国会図書館に勤めておられた折田洋晴先生にお出ましいただき、「洋書の選書業務から蔵書管理業務まで」をお話いただいた。この講義には、関心をもった、本学図書館の阿久津美都子部長をはじめとする5名の職員の方たちが参加された。うち、新座からわざわざいらしてくださった鈴木加奈子氏に、本誌に報告をお寄せいただいた。

以上、司書課程の運営のあらゆる面で、兼任講師の先生方、学内外のみなさまが惜しみなく力を貸してくださった。ここに記して、感謝申しあげる。

（文責・中村百合子）

図書館で哲学対話をする事

渡邊 文（文学部教育学科教育学専攻4年）

2012年12月15日、小雨が降る中、豊島区中高生センター ジャンプ長崎で、中高生向けに「としま哲学カフェ」が開催され、私は進行のお手伝い役としてこのイベントに参加した。この時に感じたこと、考えたことをここに述べる。

今回の「としま哲学カフェ」に集まった人たちは、中高生が約10名とその他に私と同様にお手伝いに来ていた大学生、見学に来ていた大人の方が数名いたため、全体で15名程であった。初めはその15人を二つのグループに分けて「相互問答法」が行われた。「相互問答法」は、グループの中で、一人の人に対して他の人が順番に質問していくというものである。また、他の人は質問するだけで、自分の考えを言っはならない。例えば、この時に挙げられたテーマとして、「人はどんな時に幸せを感じるか」という問いがあり、それに対してグループの中の一人が「私は家族と一緒にいるときに幸せを感じます」と答え、グループの中の他の人が「なぜそう思うのか」などの質問をしていくのである。このような質問を繰り返し、それぞれの思考を深めていくというものである。

この相互問答法を通して感じたことは、普段学校であまり活発に発言しないだろうと予想できるような高校生も自然と自分の考えを積極的に話すことができているということである。私の経験からの予想でしかないが、今回集まってきた高校生の特徴として、本が好きで、学校のクラスでは大人しいのだろうと想像できるような性格の子たちが多かったように思う。「本を読むことで現実逃避をする」というような話を何人かの子が話していた。このように、普段の生活では物事に対して比較的受動的な子たちが哲学カフェに集まることで積極的に

話し始めることは、本人たちにとっても新しい経験なのではないか。話さざるを得ない環境だったから話した、という部分もあるとは思うが、思い切って話してみることによって自分とはどのような人なのかということを知ることもなる。

また、高校生と大学生、大人という異なる年齢、年代の人々が一つの小さな輪になって話を聞き、質問し合うことはそれぞれにとってとても意義のあることである。大学生である私が、母親の世代の人々が普段どのようなことを考えているのかということを知ることができ、高校生が今どのような思いで日々を過ごしているのかということを知ることができることは、私自身の人生を考える上でも考えが深まるきっかけとなる。

例えば、私の母親世代の人が「今日も一日家族が平和に過ごせたことを感じ、寝るときが一番幸せを感じます」と話していたのを聞き、それを自分自身に当てはめて考えてみる。自分も母親になったらこのような思いを感じるのだろうか、また、自分の母親も同じようなことを考えているのだろうか、どうなのだろう、などという考えが頭の中に湧きはじめる。そしてそれに併せて、高校生が日頃感じていることを聞くことで、自分が人間の人生の中でどの段階を生きているのか、ということを感じる。このように、高校生も大学生も大人も異なる世代の人の普段考えていることを聞けることはそれぞれの人生を考える上で意味のあることなのではないか。

学校でなく図書館が哲学カフェを開催することはこのように様々な年齢の人々が集まることができるという点で良い点であると考え。今の時代では、学校に外部の人間が入る機会はほとんどない。しかし図書館であればどのような世代の人でも集まることができる。

また、上記でも述べたように、図書館でのイベントであるということから、読書好きの人が集まりやすい。今回集まった高校生も、本を読んで自分の世界に入ると話していた子や、学校の図書委員をしている子も来ていた。「読書が趣味の子は大人しい」というのは単なる私の偏見かもしれないが、普段本をたくさん読んでいる高校生がいつも考えていることを話す機会は学校生活の中ではなかなかないのではないか。その点で、図書館での哲学カフェは普段の学校生活からも切り離された場であり、他の学校の高校生や大学生、大人に自分の考えを話す機会があるということはとても有意義である。いつもはあまり発言をしない人が自分の話をするには、自分自身について考えることができるからである。

さらに、今回のように「カフェ」としてお菓子やジュースを自由に食べたり飲んだりできたことは、普段通っている学校とは切り離された空間であるということが感じられる要素であったと思う。多くの図書館では飲食禁止で私語も禁止であることが一般的であると思うが、今回のように人々が集まり、自由に話をする空間としても図書館はとても良い場所であると感じる。もちろん、図書館でなくても、様々な年代の人が集まれる場所は他にも公民館などが存在する。しかし、普段から人々が安心して読書ができる暖かい空間であり、気持ちが落ち着く場所として図書館は哲学カフェを行う空間としてとても合っているのだろう。

一方で図書館が主催するからこそ困難な点も存在するだろう。例えば、今回、読書好きな高校生が多く集まったことに対して、日々の中でほとんど本を読まなかったり図書館に親しみを感じたりしていない人たちにとっては、今回の哲学カフェもなかなか興味を持ちにくいものであったかもしれない。図書館が主催をしていると聞くと、「自分は本に興味が無いから関係ない」と感じてしまう人もいるだろう。実際に私は高校生のときにほとんど本を読まずに過ごしてきてしまった。もしも私が高校生だった時に教室に「図書館で哲学カフェをやります」という広告が貼ってあっても、あまり気に留めなかっただろうと思う。

しかし、むしろ哲学カフェのようなイベントで、これまで図書館にほとんど足を運ばなかった人々を図書館に呼ぶこともできる。今回の哲学カフェでは前半に上記のような「相互問

答法」を行い、後半は「嘘をついてはいけないのか」という問いについて全体で話し合った。このような話し合いを行う上ではやはり様々な人の考えが出てきた方が、話し合い自体に面白みが出てくるだろう。その点では、やはり本が好きな人もそこまで本を読まない人も、図書館という場所が様々な人が集まれるような空間になればそれは実現するのだと考えられる。

そのためには、多くの人に哲学カフェというものの存在を知ってもらうこととそれを実際に図書館で体験してもらう機会がもっと増えると良いと考える。

本に囲まれながら哲学する

—いわき哲学カフェの報告—

西山 溪（立教大学文学研究科教育学専攻博士前期課程1年）

2012年12月22日、冷たい風の吹く日の午後、福島県いわき市の総合図書館は多くの人を訪れていた。勉強をする学生や、新聞を読む近所の人、絵本を読む子どもなど様々だった。そのような中、図書館の一角の小部屋には次々と人が集まっていた。部屋の入り口には次のように書かれていた。—いわき哲学カフェを行います—

哲学カフェとは何だろうか。哲学という名前を聞くと、それだけで身構えてしまう人もいるかもしれない。哲学という名前に付きまとうイメージは、「偉い人が難しいことについて考える」とか「よくわからない」というものだろう。だが、哲学カフェはそうではない。哲学カフェでは参加者に哲学の専門用語や、特別な知識は要求されない。参加者がすることは、コーヒーを持ち、話すテーマを決め、テーマに対して自分の考えを—自分自身の言葉で—述べ、他者の話を聞く、ただそれだけである。ここではどのような意見でも述べることができ、また受け入れられる。「コーヒー一杯の前の平等」が約束された空間とも言えようか。

哲学カフェの歴史はそれほど昔ではない。1992年パリのバスティーユ広場の一角のカフェで哲学対話を始めたマルク・ソーテがその創始者とされている。ソーテは言う。「哲学する」とは、すでに答えは与えられているが実際にはうまくいっていない問題を、文字通り「再検討の対象とする」ことなのだ¹⁾と。哲学カフェの目的はまさにこの、普段何気なく見ている現実にある様々な問題を再検討していくことにある。

この日「再検討の対象」とされたのは、「震災後の私たちの生活」だった。訪れた約15名のいわき市在住者や出身者、いわき市で仕事をされている方々は、部屋の中で円を作り、さっそく対話を始めた。

みなさんの生活について、ここで一緒に考えていきたいことはありますか？—ファシリテーターがこう問いかけると、様々な問いが参加者の中から出てきた。「震災後変えたこと変わったこと」、「今の生活で変えたいと思うこと」、「震災によって失ったものと得たもの」、「震災病になったか」という変化を問うものから、「当事者と傍観者の温度差」といった当事者との意識のずれを話し合いたいという人もいた。

テーマを決めたのち、私たちは「変化」、特に「何が変わったか」についてまず話し合った。資源が有限であることに気づいたという人もいれば、明日がやってくるかもわからないという日常に対する不安を語る人、生まれ育った地の変化から自分のアイデンティティが損なわ